

# 先天性心室中隔欠損症の時間的地域的 集積を示した事例について

研究協力者 芦 沢 正 見  
共同研究者 禰 寝 重 隆  
(大森赤十字病院)  
木 村 正 文

## 目 的

先天異常モニターを構成している東京都内日赤産科全5施設のうちの1施設(O病院)において昭和61年5月2日の初発例より1か月以内に6例の先天性心室中隔欠損症の出産をみたので、時間的地域集積を疑い事例を検討し、頻発を疑わせる場合のモニタリングシステムの機能について考察することを目的とした。

## 方 法

モニターからの月報において頻発と判断し、集積性について過去の頻度と比較した。

## 成 績

症例は上述の6例に併せて、同じく1986年の2月と11月に出産の心奇形児(症例A及びH)2例を表1に示す。O病院は川崎市と境を接する都内最南端のO区の住宅地に在る総合病院である。出産数は1976年を除いては年間ほぼ1,000を維持している(表2)

5施設の1976年より86年にわたる11年間の出産数(死産をふくむ)・心奇形数・心臓及び循環器系奇形頻度・11年間通算心奇形頻度・心奇形分類(ICD-9)による奇形発生数を表2-7に示す。

以下各表について注意をひいた諸点について順をおって述べてみたい。

表1はO病院産婦人科において経験した1986年1~12月の1年間の心奇形の全8症例を表記したものである。

一見して8例中6例が5月2日より6月2日にかけて集積していることは明かである。過去においてもO病院では84年に7例、85年に6例の出産があり、5施設のなかで最も頻度の高い施設である。(表3, 5)より弱い集積がK産院においても81-82年にみられる。O病院の年間心奇形児出産数の予測値に76-83年奇形児出産数の平均1.9をとり、84-86年の出産数についてZテストを行なうと $Z=6.40$ 、同様・K産院について76-80年の平均2.0を予測値として81-82年の

表 1 O 病院において1986年出産の心奇形症例

	出産年月日 体重・性・年齢・血液型	O 病院 産婦人科 在院診断	既 往 歴 分 娩 歴	確定診断 診療機関	職 業	妊 娠 中 嗜好・薬物・感染等
A	1986-2-22 3058g (♀) O 区, 28歳 (A) 生 産	VSD	—	—	(主婦) 夫: 会社員	早期: 膀胱炎のため抗生 物質, 鎮痛剤, (ルテウムデボ) 中期: 膀胱の症状 晚期: アルコール飲料 ベット: イヌ
B	1986-5-2 4244g (♀) O 区, 32歳 (O) 生 産	VSD	自然死産	VSD (S 記念病院)	板金自営業 事務 夫: 板金自営	早期: 嘔吐食欲不振 便秘 中期: 便秘 晚期: 浮腫 全期間 ビタミンE 米飯添加 ベット: 犬
C	1986-3-4 2978g (♀) S 区, 35歳 (B) 生 産	VSD	満期1	VSD (同上) 8月受診 自然治療	(主婦) 夫: 技術系 会社員	中期晚期: 浮腫 風疹 (×8 抗体価) HBe 抗原(+) HBc 抗原抗体(+) 喘息: 薬剤投与受けず タバコ: 全期間1日10本
D	1986-5-5 3790g (♂) M 市, 26歳 (A) 生 産	VSD	—	VSD (同上)	(主婦) 夫: 会社員	早期: 中期: 嘔気・食欲 不振 早期: かぜ, 新ルルエー スS錠 早期: 晚期: アルコール 1/2合 晚期: 浮腫, 貧血 (ナックール内服)
E	1986-5-12 2884g (♀) O 区, 30歳 (A) 生 産	VSD	中絶1 (1985-1 妊3カ月)	VSD (同上)	自営業手伝い 夫: 食品卸業	早期: 嘔気 中0 晚期: 帯下, 掻痒 全期: 浮腫 晚期: 左足関節捻挫のため レ線 タバコ 妊娠前1日20本
F	1986-5-21 3028g (♀) O 区, 27歳 (O) 生 産	VSD 動脈管開 存	—	VSD (同上)	(主婦) 夫: 事務系 会社員	早期: 便秘 中期: 貧血 晚期: 嘔気 全期: 帯下 妊娠可能のころ, 夫が交 通事故のため鎮痛剤内服
G	1986-6-2 2610g (♂) O 区, 30歳 (O) 生 産	VSD	満期1	VSD (S 大病院)	(主婦) 夫: 会社員	早期: 嘔気, かぜ 中期: かぜ, 帯下 カンジダ坐薬, 下腹痛 風疹 (×32 抗体価)
H	1986-11-21 2682g (♀) S 区, 32歳 (不明) 生 産, 児12-21死亡	多血症 (先)心疾患	自然流産2	VSD (都立H病院) 心内膜欠損 単心房 肺動脈欠損 脾欠損の疑 い	事務 夫: 会社役員	早期: かぜ 38°C 内服薬 4日間 中期: 嘔気, 食欲不振 酒: 全期ビール2杯 ベット: ネコ

表 2 都内日赤 5 施設における出産\*数 (1976—86)

\* 自然死産を含む

施設名	G	M	K	O	S	計
1976	1,843	1,371	1,222	844	799	6,079
77	2,693	1,987	1,571	1,048	965	8,264
78	2,917	1,824	1,508	1,089	908	8,246
79	2,927	1,696	1,475	1,012	725	7,835
80	2,972	1,645	1,261	946	646	7,470
81	3,223	1,791	1,272	1,075	711	8,072
82	3,470	1,909	1,433	1,107	701	8,620
83	3,248	2,091	1,545	1,067	633	8,584
84	3,317	2,277	1,699	1,134	630	9,057
85	3,038	2,236	1,766	1,034	525	8,599
86	2,879	2,203	1,674	998	456	8,210
計	32,527	21,930	16,426	11,354	7,699	89,036

表 3 同 心奇形\*児数 (1976—86) \*「疑い」を含む

	C	M	K	O	S	計
1976	—	1	2	1	—	4
77	1	2	—	2	—	5
78	1	2	3	4	—	10
79	—	3	1	1	—	5
80	2	2	4	1	—	9
81	1	—	6	1	—	8
82	1	1	7	1	—	10
83	1	4	2	4	—	11
84	1	1	2	7	—	11
85	2	—	—	6	—	8
86	1	4	2	8	—	15
計	11	20	29	36	—	96

表 4 心室中隔欠損\*児数 (1976—86) \*「疑い」を含む

	C	M	K	O	S	計
1976	—	—	—	—	—	—
77	—	2	—	1	—	3
78	—	—	2	2	—	4
79	—	—	—	1	—	1
80	1	2	—	1	—	4
81	—	—	4	—	—	4
82	1	—	4	1	—	6
83	—	2	1	2	—	5
84	—	—	—	3	—	3
85	1	—	—	6	—	7
86	—	3	—	8	—	11
計	3	9	11	25	—	48

VSD児(%) 27.3      45.0      37.9      86.2      —      50.0  
心奇形児

表 5 心臓及び循環器系の奇形\* (ICD-9, 745, 746, 747) \*「疑い」を含む  
 出産10,000対

	C	M	K	O	S	計
1976	—	7.3	16.4	11.8	—	6.6 (7.6)*
77	3.7	10.1	—	19.1	—	6.1 (6.9)
78	3.4	11.0	19.9	36.7	—	12.1 (13.6)
79	—	17.7	6.8	9.9	—	6.4 (7.0)
80	6.7	12.2	31.7	10.6	—	12.0 (13.2)
91	3.1	—	47.2	9.3	—	9.9 (10.9)
82	2.9	5.2	48.8	9.0	—	11.6 (12.6)
83	3.1	19.1	12.9	37.5	—	12.8 (13.8)
84	3.0	4.4	11.3	61.7	—	12.1 (13.1)
85	6.6	—	—	58.0	—	9.3 (9.9)
86	3.5	18.2	11.9	80.2	—	18.3 (19.3)
計	3.4	9.5	17.7	31.7	—	10.9 (11.8)

\*: ( ) 内はS産院を除いた計

表 6 心臓及び循環器系の奇形\* \*「疑い」を含む (1976—86)

ICD-9	C	M	K	O	S	計
7450 総動脈幹遺残	—	—	—	—	—	—
7451 大血管の転位	2	3	1	1	—	7
7452 ファローの四肢	—	3	4	1	—	8
7453 単心室	—	—	—	—	—	—
7454 心室中隔欠損	3	9	11	25	—	48
7455 卵円孔開存	—	—	4	—	—	4
7456 心内膜床欠損	—	—	—	—	—	—
7457 二腔心	—	—	—	—	—	—
7458 その他の心臓球の異常及び中隔閉鎖異常	2	2	—	1	—	5
7458 詳細不明の中隔欠損	—	—	—	—	—	—
7450—59 心臓球の異常及び中隔閉鎖異常	7	17	20	28	—	72
7460—69 心臓のその他の異常	3	—	1	1	—	5
7470—79 循環器系のその他の異常	1	4	8	7	—	20
計	11	21	29	36	—	97

表 7 心臓及び循環器系の奇形の頻度 (4976—86) 出産10,000対

ICD-9	C	M	K	O	S	計
745	2.2	8.1	12.8	24.7	—	8.1 (8.9)*
746	0.9	—	0.6	0.9	—	0.6 (0.6)
747	0.3	1.9	4.9	6.2	—	2.2 (2.5)
計	3.5	10.0	18.3	31.7	—	10.9 (11.9)

\*: ( ) 内はS産院を除いた計

出産数について求めると $Z=4.50$ となり、いずれも有意の増加といえる。居住地は5例がO病院と同一のO区2例が隣接のS区であり、正常分娩集団と同様である。

心奇形の種類は表4に示すように、O病院では最もVSDの多い施設があるが、(1986年を除いても60.7%)1986年の心奇形は全8例がすべてVSDであった。O病院86年出産の体重は症例Bが4,240グラムであるが、予定日より超過はしていない。症例D(3,790g)のみ予定日4月25日より11日超過している程度であり、著明な在胎週数の延長はない。

以下O病院の1986年の症例について述べる(表1)

性別は男児2, 女児6で諸家の報告どおり女児に多かった。

既往分娩歴には特記すべきことは認められない。

職業に関しても妊娠に影響を及ぼすと考えられるものは認められない。

妊娠中の自覚症は8例の全例に何らかの訴えがあり、うち7例は早期にも訴えのある者である。そのうち感冒症状のため服薬は2例、妊娠早期に膀胱炎のため抗生物質、鎮痛剤を処方された1例がある。

妊娠直前から妊娠中の風疹罹患歴は全例とも皆無である。妊娠中期に抗体価測定が2例(症例C, G)あるもそれぞれ1回のみ。

嗜好ではアルコール飲用3例(A, D, H), 喫煙2例(C, E)である。

## 考察とまとめ

都内日赤5施設のうちの1施設の病院産婦人科において心奇形とくにVSDの頻発が1986年5月より6月にかけて認められたので、1976年にさかのぼり、心奇形の発生状況を各施設について調査した。O病院はもともと頻度は高く、1976年以降の11年間の平均頻度は出産1万対31.7、(最小は1982年の9.0, 最大は1986年の80.2)である。これにひきかえS施設は出産7699中0であり、ついでC施設も32,527出産中11例で出産1万中3.4と他の施設との間に、著しい較差がみられた。今後、施設間の差をせばめるため、心奇形リポーティングに対する関心の均一化、実用的な臨床診断基準の設定等の作業が要請されよう、なお在院中の診断を確認するために新生児期まで追求調査が出来るようなサブシステムをモニタリングシステムに従属して設けることも考慮されるべきであろう。

時間的・地域的集積が存在することが統計上は明示されても、診断水準が所要の水準にそろっていることが前提条件であることはいうまでもないが、この点についての検証は今後の課題となる。

隣接区に都立E病院が在るが、1976年以降の心奇形の発生数の推移をO病院と比較することができれば、地域的集積の拡がりとその時間的推移についての知見はさらに確認されることになる。

原因として推測される共通的のもの、ないし特異的のものは何ら認められないと判断したが、なお仮説を設けてケースコントロールスタディを行なう余地は残されている。

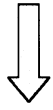
風疹感染の有無については系統的なペア血清の抗体価測定を行なうことにより、判定が可能であるから、サーベイランスの一環としてルーティンに実施されれば有用な資料となる。厚生省サーベイランス報告によると、本年（1987年）に入って風疹の流行\*が小児にみられ、ワクチン未接種の母への感染が危ぶまれる現状にあり、先天異常サーベイランス体制の側においても、抗体検査や胎児感染に伴う先天性風疹症候群の診断基準の周知等の対策をとっておくことが望まれる。

○病院退院後の紹介専門医療機関に対する患者のコンプライアンスは良好であり、診断の確定、経過予後の情報収集に多大の便益があったことを付記し、専門医療機関の関係各位に謝意を表する次第である。

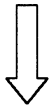
注\*：東京都における1985年の感染症サーベイランス定点当り患者数は4月末より5月中旬にかけて1.0、7月上旬に0.8のピークを示す小流行、1986年は6月下旬定点当り4.1のピークをまし、10月に谷となるが、12月より漸増し、1987年の流行につながっている。本年の流行は3月下旬定点当り15.8の近年にない著しいものである。

## 文 献

- 1) 厚生省科学研究班（班長：高安正夫）厚生省医療研究助成金交付による研究報告，課題一児童における心疾患の診断基準の設定と管理に関する研究（昭和42年度）
- 2) 近藤喜代太郎他：東京都立病産院における先天異常モニタリング：1978年～1982年総合報告，1984.
- 3) 厚生省保健医療局結核難病感染症課感染症対策室：感染症サーベイランス週報 1985年第1週～1987年第12週
- 4) 中沢 誠，高尾篤良，瀬口正史：本邦における新生児期心疾患の診療実態調査．小児科診療 25(9)：1517—1521，1986.



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 目的

先天異常モニターを構成している東京都内日赤産科全 5 施設のうちの 1 施設(0 病院)において昭和 61 年 5 月 2 日の初発例より 1 か月以内に 6 例の先天性心室中隔欠損症の出産をみたので、時間的地域的集積を疑い事例を検討し、頻発を疑わせる場合のモニタリングシステムの機能について考察することを目的とした。